

ドービニエの日本

—— 『世界史』と『サンシー殿のカトリック告白』を通して ——

濱田 明

Agrippa d'Aubigné アグリッパ・ドービニエの代表作 *Les Tragiques* 『悲愴曲』（初版1616年）に当時ヨーロッパ世界に知られた国が中国、日本を除きほとんど登場していること、両国は風刺文書 *Confession catholique du Sieur de Sancy* 『サンシー殿のカトリック告白』（以下『サンシー』と略記）で言及されていることをフラゴナールが指摘している¹⁾。その『サンシー』については、高橋薫氏が語り手サンシーの意味を問う論文を発表しており、その注で作品の概要を紹介し、日本に言及している箇所も既に触れている²⁾。なお他の作品では *Histoire universelle* 『世界史』（初版1619年）が日本に対する言及を含んでいる。『世界史』が歴史家ドービニエの代表作であり、『悲愴曲』と並ぶ畢生の作品であるのに対し、『サンシー』は死後出版にとどまる。また事実を書くことを前提とする歴史書と事実を風刺に利用する風刺文書とジャンルも異なるが、本稿では、これら二つの作品から窺えるドービニエにとっての日本の意味を検証してゆきたい。

『世界史』における日本

『悲愴曲』においてはプロテスタントの立場からカトリックに対する怒り、宗教対立の犠牲者への哀悼を劇的に、あえて言うならば主観的に表現したドービニエであるが、『世界史』においてはその中立性、客観性を主張する³⁾。なお世界史という空間的、時間的にも広がり大きなタイトルについては説明が必要かもしれない。この歴史書が対象とする時代はアンリ四世の誕生から17世紀初頭まで、そして記述に際し時代の区切りとなるのは主に宗教戦争の和議である。従って、

-
- 1) Marie-Madelaine Fragonard, «La tragédie universelle. Image des relations entre les nations», in *Les Tragiques d'Agrippa d'Aubigné*, éd. par Marie-Madelaine Fragonard et Madelaine Lazard, Champion, 1990, pp.145-165.
 - 2) 高橋薫「*Confession catholique du Sieur de Sancy*—語りと世界—」『駒澤大学外国語部研究紀要』No.11, 1982, pp.219-252. この論文は「サンシー」をフランスの研究者に先駆け本格的に論じたものであり、Eliane Kotler, «De quelques aspects de l'argumentation dans la *Confession catholique du Sieur de Sancy*», in *Albineana* (Cahiers d'Aubigné), XIII, Niort, 2001, pp.153-168 などの議論に先行している。
 - 3) 記述の対象、著者の立場については、以下の論考に多くを負っている。高橋薫「*Histoire Universelle* (d'Aubigné) —十六世紀の歴史主義と党派性—」『駒澤大学外国語部研究紀要』No.16, 1987, pp.273-390. *Histoire universelle*については、André Thierry, *Agrippa d'Aubigné, Auteur de l'Histoire Universelle*, Université de Lille III, Service de Reproduction des Thèses, 1982が基本的文献。Thierryの追悼論文集 *Autour de l'Histoire universelle d'Agrippa d'Aubigné. Mélanges à la mémoire d'André Thierry*, par Gilbert Schrenck, Genève, Droz, 2006が研究の現状を示している。

同時代史と理解すべきであろう。空間は、世界と言っても当時知ることの出来たすべての世界ではなく、近隣四国（ドイツ、イタリア、スペイン、イングランド）、次いで東方、南方、西方、北方のように大まかに分けられている。そして章ごとに各時代の出来事が言及されるが、その際フランスの国内情勢と結びつきの深い近隣諸国の情勢が詳述されるのは当然であろう。

日本についてまず確認すべきは、これらの世界の中で日本が空間として独立した存在として記述の対象になることはないという点である。東方はトルコ、ペルシャなどの記述が中心であり、極東が独立した記述の対象となることはない。「西方」*«Occident»*という表現は今日の意味とは異なり、この書ではフランスから見た西方を指す。狭義には南北アメリカの方面を意味するはずであるが、後に見るようにその及ぶ範囲は広い。第一の書16章「西方の出来事」ではスペインとポルトガルが教皇アレクサンドル6世の設定した教会保護権の境界線に従い、ペルー、パナマ、ブラジルなどに進出する状況が描かれている。スペインの先住民に対する暴力的な支配と対照的に、ドービニエはポルトガルについて、その進出の際の穏当な姿勢を評価する。ポルトガルのゴア、セイロン進出、そしてセイロン島の偶像崇拜に関するエピソードの後、日本についての言及が見られる。第一の書16章には日本が二度言及されているが、以下が最初の箇所である。

ポルトガル人達は同じ1554年、既にAntoine Mota, François Zermor, Anthoine Pexの遭難によって発見されていた日本Jappanの島を確認するに到った⁴⁾。

ドービニエは、このようにまず大航海時代のポルトガルの進出先としての日本到着を記すが、日本について、地理、習慣など具体的に述べることはない。ドービニエの筆は次いでこれらのポルトガル人の成功に続こうとしたフランス人の企てを述べることに移り、1555年に開始されたVillegagnon ヴィルガニョンを指揮官とするブラジル植民計画について、Thierry版『世界史』で3ページを費やし詳述する。ヴィルガニョンはプロテスタントに対し当初は理解を装いながら、次第にカトリックの儀式を強要し、自分に従わない部下を迫害し、ポルトガル軍が迫ると、彼らを置き去りにしてブラジルを去る。ドービニエは取り残された部下たちのその後を以下のように述べる。

迫害を逃れ原住民の間に取り残された者たちは、乏しい食料でどうにか生き延び、最終的にはフランスに戻る事が出来た。それは、この後少しそれも曖昧に話題にする中国（というのも、この王国が外国人に閉ざされているから）と日本Japponからの商船の助けによるものであった。もっともイエズ

4) Agrippa d'Aubigné, *Histoire universelle*, éd. André Thierry, Genève, 1981, Droz, t. I, p.113. 人名は、Moraとなっている明らかな誤植を除き、ドービニエの表記のまま引用した。なお彼らの1543年の種子島漂着が資料上確認できる最初の西洋人の日本到着というのが通説である。

ス会の言葉を信じればであるが⁵⁾。

商船は原文では単数形なので、中国、日本の商船ではなく、中国、日本を經由した船という意味と解されよう。以上、第一の書16章の「西方」自体が、西方そのものの国々の紹介ではなく、その空間をどのようにスペイン、ポルトガル、そしてフランスが進出したかが記述の中心であった。その中で日本はヨーロッパ諸国の大航海時代の到着地、船の寄港地に過ぎず、国のありように触れられることなく、いわば大航海時代のヨーロッパ諸国の軌跡上の点に過ぎない⁶⁾。

ドービニエの日本についての言及は第三の書24章「西方」においても見られる。基準となる年代は1563年前後であるが、この章では当時の具体的な出来事を記述することなく、以下のように始まる。

スペインは少しの木で多くの火災を引き起こしながら悲劇を演じることなく観客として傍観していただけだった。そのためこの時代、スペインについて論じることがほとんどないため、スペインが全ヨーロッパにした贈り物であるイエズス会について一言述べようと思う⁷⁾。

それはどんな贈り物であったか。この後イエズス会について、創立者ロヨラの略歴、パリでのザビエルをはじめとする仲間との出会い、修道会の設立の許可を得るためのローマでの運動について、そしてフランス国内で、ソルボンヌ、高等法院からイエズス会が拒否されたことについて述べる。ドービニエは次いで、イエズス会を「野心的なセクトでありうわべを飾った修道会」と断ずるエチエンヌ・パスキエの激しい非難を紹介する⁸⁾。日本への言及が見られるのは続く箇所においてである。

5) *Ibid.*, p.116. このブラジル植民計画については、カトリックのテヴェとプロテスタントのレリーの報告を翻訳で読むことが出来る。アンドレ・テヴェ（山本顕一訳）『南極フランス異聞』（『フランスとアメリカ大陸・一』岩波書店、大航海時代叢書第II期19巻、1982年所収）、ジャン・ド・レリー（二宮敬訳）『ブラジル旅行記』（『フランスとアメリカ大陸・二』岩波書店、大航海時代叢書第II期第20巻、1987年所収）。

6) なお中国については予告どおり、次章17章「北方」の冒頭で紹介がある。ただし、イエズス会神父マテオ・リッチがもたらした16世紀末時点での中国に関する新たな情報は見られず、マルコ・ポーロの書を挙げることから伺えるように、主に元の時代の記述である。タルタル人を二種類に分け、南方（今日の中国）はより文明化されていること、北方の移動民族の習慣、信仰を記述した後、キルギスからモスクワへと筆は移る。

7) Agrippa d'Aubigné, *Histoire universelle*, 1982, t. II, p.180. なお当事者になることなく影響力を行使するだけで、ヴェネチアなど他国に犠牲を強いた卑怯な国というスペインのイメージについては、以下の論文を参照。Claude-Gilbert Dubois, «“L'Espagne au front.” : Remarques sur quelques occurrences des affaires d'Espagne dans les œuvres d'Agrippa d'Aubigné datées de 1616.», in *Albineana* (Cahiers d'Aubigné), XIII, Niort, 1990, pp.79-94.

8) パスキエはまたイエズス会の総会長がスペイン王によって選ばれていることを指摘する。この箇所については前掲の高橋薫氏の論文のpp.298-300を参照。『世界史』が中立性を主張しながら、イエズス会に対しては明らかに否定的な筆致であることは高橋氏をはじめ研究者の一致した見解である。なおドービニエが匿名で著したイエズス会士Jean-César Boulengerとの論争文書が近年出版された。Agrippa d'Aubigné, *La Responce de Michau l'aveugle*, éd. par Jean-Raymond Fanlo, Champion, 1996.

この間、このイエズス会による善と悪、その創立だけでなく、維持、また遠く離れた地域、日本までに到る派遣などはスペインの力に依ることになるのである。日本ではザビエルが奇蹟的な出来事、すなわち自分の棒をもたせた男児を遣わして死者達を蘇らせたことなどが伝えられているが、そのような出来事は歴史書にふさわしいものだと私は思わないし、そのような奇蹟譚で歴史書を満たしては歴史書の信頼を損なうことになる⁹⁾。

イエズス会の活動がスペインに支えられているとの指摘はこの章の冒頭の箇所と対応する。ロヨラをはじめザビエルなどイエズス会の創設にかかわった主要人物にはスペインと結びつきが深い者が多く、スペイン王家の支援もあったのは事実であるし、1580年にはスペインはポルトガルを併合する。しかし、イエズス会の布教の成功、イエズス会インド管区、特にザビエル以降の日本における布教の成功はポルトガル王室の庇護によるものと一般に考えられている¹⁰⁾。ドービニエがその事実を知らなかったというよりは、海外進出の方法について好意的に述べていたポルトガルに触れず、スペインとイエズス会の結びつきを強調することで、彼らに対する反感を明確に示そうとしたと考えるべきであろう。

ザビエルの布教については早くからフランスにも知られ、ドービニエ以前にもギヨーム・ポステルなどがその著作で称えている¹¹⁾。ポステルはイエズス会に入会した人物であるため（後に除名）、ザビエルを賛辞する表現が見られるのは当然かもしれない。ドービニエの場合、歴史書という事実を積み重ねて記述すべきところ、信徒獲得など、ザビエルの布教活動に実態に触れることなく、「奇蹟譚」にのみ言及し、そして直後にそれを歴史書に相応しくないものとしている点が注目されよう。次に続く箇所では、イエズス会について費やした文章の価値を読者に喚起する。

我々が「西方」について言うておかねばならないのは以上である。ここまでを、我々の読者にこのセクトの由来を教えるために使ったが、それも理由のないことではないであろう。多くの人々に崇拜され、それ以上の人々に憎まれ、誰からも軽んぜられることがないこのセクトが、後に我々の心配の大きな種となるのであるから¹²⁾。

9) Agrippa d'Aubigné, *Histoire universelle*, t. II, p.185.

10) イエズス会の活動に関する研究は数多くあるが、最近の書かれたものでは次のものが参考になった。高橋裕史、『イエズス会の世界戦略』講談社、2006年。

11) René Etiemble, «Le Japon des Jésuites et des philosophes», in *Le Japon et la France, images d'une découverte*, Les Sept climats, Publications Orientales de France, 1974, p.12. BnFのGallicaで参照したポステルの以下の作品（出版地、出版年代は未詳）、Guillaume Postel, *Des merveilles du monde, et principalement [sic] des admirables choses des Indes, & du nouveau monde* では、38 versoなどに西洋に生まれたキリスト教の教えを東洋に伝えることの賛辞が続く。

12) Agrippa d'Aubigné, *Histoire universelle*, t. II, p.185.

「西方」の出来事について何も触れないまま、この文章で第三の書24章「西方」は終わる。本来「西方」をめぐる出来事を論じるはずが、「西方」という空間を支配したスペインの「ヨーロッパへ向けての贈り物」であるイエズス会、そして布教の場をヨーロッパだけでなく、「西方」まで広げていったイエズス会について述べるという一応の流れはある。しかし章の結びの言葉で自ら述べているように、ドービニエが読者に最も伝えたかったのは、「西方」の現状でもなく、その「西方」を支配するスペイン以上に、ヨーロッパを超えて「西方」まで影響を及ぼしているイエズス会に対する警鐘なのである。

『サンシー』における日本

『サンシー』は実在した人物Nicolas de Harlay, sieur de Sancy (1546-1629) を主な語り手に、基本的には彼の告白という形式をとった風刺文書である。サンシーその人の実像については近年実証的な研究も公にされているが¹³⁾、この風刺文書では、『サンシー殿のカトリック告白』という題から分かるようにプロテスタントから「立身出世」のために改宗した憐れむべき人物として登場する。彼の言葉が一見カトリックの立場を擁護するものと読めるものでありながら、実は逆の効果を狙ったものであることは文章の端々から読者にとって容易に理解できよう。

作品は第一の書、第二の書の二部構成になっており、日本への言及が見られるのは、第二部8章「『ローマ風の殉教』について」である。まず章のはじめに「異教徒」すなわちプロテスタントを作り出す点において聖書に次いで危険な書は、「分厚い殉教伝」であり¹⁴⁾、6、7千人に上るプロテスタントの教義の為に死んだ者たちには真の殉教の徽が見られるとする。カトリックに改宗していながら、プロテスタントの殉教について、サンシーは些かの疑義も挟まない。

ところで16世紀の後半、「殉教」によって自らの宗教の大義を主張できたのはプロテスタントであったことを思い起こそう。ローマ帝国において公認されるまで初期キリスト教徒は迫害を受け、信仰のために命を落とし、カトリック教会は後に彼らを聖人として称えた。しかし16世紀にプロテスタントが生まれると、弾圧者となったのはカトリック教会であり、信仰を守るために死ぬことを余儀なくされた者はプロテスタントなのである。スペインの異端審問、フランスの聖バテルミーの虐殺の犠牲者達、ドービニエが『悲愴曲』を捧げたのはまさしく彼らに対してであった。

『サンシー』の文章に戻ると、危機意識を抱いたサンシーは、プロテスタントに対抗するために、カトリック側も自分たちの殉教者を称えた『ローマ風の殉教』と題した一冊の本を書くことを提案する。そしてこの章の残りの箇所ではカトリック側の殉教伝に名を連ねるべき殉教者の名を挙げてゆくことになる。

13) Gilbert Schrenck, *Nicolas de Harlay, sieur de Sancy (1546-1629). L'antagoniste d'Agrippa d'Aubigné. Étude biographique et contexte pamphlétaire*, Champion, 2000.

14) Agrippa d'Aubigné, *Œuvres*, éd. Henri Weber, Jacques Bailbé et Marguerite Soulié, Gallimard, 1968, p.1338. 注によると、Jean Crespinが1554年に初版を、その後彼の後を継いだSimon Goulartが増補し、1619年に決定版を出版したプロテスタント側の殉教伝を指す。

しかしこの殉教伝、内容の以前にその文体から風刺は明瞭である。サンシーは「*Comte de Permission*」の「飾りの多い文体」を使用すべきだとするが、プレイヤード版の注によると、実在したこの本はサヴォア公によってパリに連れてこられた羊飼いが書いた意味不明の予言の書であり、であればどう考えても殉教の真正を保証するのにふさわしいものではあるまい。そして最初の殉教者として挙げられたのはパリとトゥーレーヌ地方の司祭二人、彼らは宗教的対立の中で負傷したり亡くなったりしたが、彼らが称えられるのは「他の殉教を引き起こすために民衆を策動した」ためとのこと。もちろん興奮した民衆によって殺され、「他の殉教」で亡くなったのはプロテスタントである。直後に続く、日本が言及される部分を以下に引用する。

そこから話を変えるために、日本へ赴くことにしよう。そこでは、イエズス会士たちの言葉によると、イエズス会士が磔刑にされ、大いなる奇蹟を起こしたということだ。またそれらの奇蹟は日本以外では起こり得ないという。なぜなら他の国々では信心などないからだ。それが本当かどうか確かめるさせためにフランスの全てのユグノーを日本に行かせなければなるまい¹⁵⁾。

このように日本はイエズス会の殉教の土地として言及されている。確かに、1597年に長崎で処刑された26人の殉教に始まる日本でのキリスト教徒の殉教はヨーロッパにおいても広く知られることになる¹⁶⁾。ただイエズス会の奇蹟が日本以外ではあり得ないとか、他の国々には信心がないという断定に対して、「それが本当かどうか」確かめる必要があると、語り手のサンシー自ら疑問を抱いている。「フランスの全てのユグノーを日本に行かせなければなるまい」と彼が言う時、誇張によってそれが不可能であり、その必要がないことは読者にとって明白である。日本は、確かに、殉教、奇蹟の土地として紹介されている。しかし、それが事実かどうかは、サンシーの誇張、疑問という語りによってまず問われている。そして何より、このサンシーが疑問を抱く日本の殉教、奇蹟を伝えるのはイエズス会の言葉なのだ。

日本の次にはプロテスタント勢力が優勢になったイングランドで殺されたカトリックを殉教者として称える。しかし、この章の後半に到って『ローマ風の殉教』を飾るにふさわしいとされる殉教者たちの生前の行いがエスカレートしてゆく。アンリ三世を暗殺したジャック・クレマンなど、狂信的な王殺しの者たちが聖人として次々と紹介されてゆくのだ。もちろん彼らもプロテスタントを異教徒とみなす立場、またカトリックに敵対的な政治を行う王を排除しなければならないとする立場からは英雄視されることもありえよう。しかし彼らは処刑される前に罪

15) *Ibid.*, p.654.

16) Henri Cordier, *Dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l'empire japonais rangés par ordre chronologique jusqu'à 1870, suivi d'un appendice renfermant la liste alphabétique des principaux ouvrages parus de 1870 à 1912.*, E. Leroux, 1912によれば、26聖人の殉教に限ってもドービニエの生前に22種類（うちフランス語版4種類）の出版を数える。

びとであり、殉教の点で、初期キリスト教徒はもちろんプロテスタントに及ばないことは明らかである。そして極めつけはこの章の最後を飾る殉教者である。それは夫との愛の営みの機会を失ったことによって死んでしまった伯爵夫人なのである。サンシーはその死を「これが当世風の殉教なのだ」として結ぶ。『ローマ風の殉教』の立派な完成である。

終わりに

以上見てきたように、ドービニエが言及したのは、歴史書『世界史』ではポルトガルの海外進出、イエズス会の布教の土地、ザビエルが奇蹟を行った土地としての日本であり、風刺文書『サンシー』ではカトリックの殉教、奇蹟の土地としての日本であった。

周知のように、ドービニエの生きた16世紀後半から17世紀にかけ日本に関係する情報はイエズス会経由であることが多かった。日本からローマに毎年のように送られてくるイエズス会報告書は、第一義的にはイエズス会内部の資料であっても、特に殉教など興味を呼ぶテーマであればそれが出版され、各国語に翻訳され広く一般にも流布した。年代的に、プロテスタントのイギリス、オランダ経由の情報が増えるのは17世紀に入ってからである。その意味でプロテスタントのドービニエであっても、16世紀の世界を中心に扱う『世界史』だけでなく、『サンシー』でもイエズス会からもたらされた情報を利用したのは当然とも言える。しかし日本への言及にはイエズス会、カトリックに対する疑義、批判がつきまとっていた。

『悲愴曲』が宗教戦争のプロテスタントの悲劇を聖書、古代ローマなど、同時代と古代の世界を自由に重ね合わせつつ劇的に描きだしたとすれば、『世界史』『サンシー』はいずれも同時代の空間、時間の中で出来事と人物を描いたものと言える。ドービニエにとっての同時代に日本は確かに存在した。しかし、歴史書、風刺文書とジャンルは異なっても、少なくとも二つの作品から読み取ることが出来たのは、ドービニエにとって日本自体が純粋な興味の対象になっていたわけではなく、イエズス会の言葉によって懐疑、批判とともに紹介される奇蹟、殉教の地であったことである。一生をプロテスタントの戦いに捧げたドービニエにとって、日本は遙かかなたの国でありながら、カトリック、イエズス会との戦いの場であったと言えよう。

(熊本大学准教授)

